

## 初任者研修報告

曾 我 雄 司

【抄録】 新任者に課される初任者研修を1年間受けることで、本校の実践の積み重ねや他校の試みを知り、教科指導・生徒指導について深い理解を得た。また学校運営や国立大学附属学校のあり方についても考える視座を得ることができた。

【キーワード】 初任者研修 社会科授業研修 授業外研修

### 1、はじめに（研修概要）

私は平成18年（2006）4月、名古屋大学教育学部附属中等高等学校（以下、「本校」とする）に社会科教諭（日本史担当）として着任するにあたって、法令に従い1年間の初任者研修を受けた。指導教員は、本校の前副校長であり、かつ社会科日本史担当の前任者でもある丸山豊氏である。

研修は大きく分けて校内研修と校外研修に分けられる。

校内研修は、指導教員の授業観察に基づく授業改善に関する研修、教員としての資質向上を図り、教員としての使命感や知見・指導力などを涵養するための講義を軸として行われた。研修時間は、年間約300時間に及ぶもので、その3分の1程度が授業改善に関する研修である。また5月、8月、3月の三度、研究授業を行い、研修内容の定着の確認とさらなる課題の発見を図った。

校外研修は、多くの現場教師の実践から、授業の進め方や学級経営などについて学ぶことを目的に行われた。東海地区附属連盟研究会（8月22日）などにおいて、国立大学附属学校の実践を学ぶだけでなく、私学フェスティバル（7月15日・16日）などでは私学の実践に、歴史教育者協議会（2月3日・4日）などにおいては、愛知県内の公立小・中・高校の実践にふれることができた。また奈良女子大学附属中等教育学校における全附属高等学校部会教育研究大会（10月20日）や筑波大学附属駒場中等高等学校教育研究会（11月24日・25日）への参加により、愛知県外の学校における教育実践を知ることができた。さらに教育基本法シンポジウム（5月26日）などを通じて、名古屋大学における教育研究についても知見を広めることができた。（校外実習については、表にして末尾に掲載）

指導教員の入念な指導計画の下、研修は多岐にわたり、かつ充実したものとなったため、その全てをここに記すことは難しい。ゆえにこの初任者研修報告では、授

業改善研修と授業外の研修にふれ、その後、研修全体について総括する形をとりたい。

### 2、授業改善研修について

校内における授業改善に関する研修は、週に3日程度のペースで、指導教員による1～2コマの授業観察を受けて行われた。指導教員からは、板書の在り方といった基礎的な事項から歴史事実提示と生徒の歴史観形成といった歴史教育の根本にふれる問題に至るまで様々な指導を受け、改善のための工夫をしてきた。ここでは年間を通じて、私が課題としてきた事項とその改善のための試み二点をあげておく。

一つの課題は、発問の在り方であった。当初、私の授業は教員が一人で授業内容を進める、いわゆる講義型の授業であった。ゆえにいかに生徒の疑問を授業中で引き出し、考えさせるか、ということが大きな課題となった。

高校の歴史教科（日本史・世界史）が担当ということもあり、発問を授業内に取り込んだ最初の時期は、どうしても知識を問うような一問一答式に陥りがちだった。そこで教科書・副教材の図版などから絵解きのような形で問題を考えさせる、質問ではなく感想・感覚を開いてみるなど、様々な工夫を試みた。

しかしながら発問者が答えやすく、かつ単純な受け答えに終わってしまわない発問は、なかなかできなかった。また発問が次の疑問・質問を呼ぶような形にもなかなかならない。となると、次に考えていくべきは「授業の中に発問を取り入れる」のではなく、「発問を中心に授業を組み立てていく」ということだが、限られた時間数と私の技量ではこれもままならなかった。

社会科の目標の一つは、教科書の内容を「知識」として生徒の中に構築させること以上に、社会に対する問題意識を芽生えさせ、生徒たちに将来の社会を担う公民としての資質を持たせることにあると考える。そのために生徒たちの疑問・自発的な質問が生まれやすい授業をすることは、今後も課題としていきたい。

もう一つの課題は、一回の授業に関する計画の立て方、及び授業の山場の設定についてであった。教育実習などの短期間一回毎の授業ならばいざ知らず、年間を通しての連続授業となると、どうしても前の時間の積み残しがあったり、試験範囲を終えるために駆け足で進めなくてはならなかったりして、その授業のポイントがあいまいになってしまうことがある。この点を如何に克服していくかも、研修を通じての課題であった。

最初のうちは、授業のポイントを最初に板書してみたが、授業中の板書事項との関わりがわかりづらく、かえって生徒に混乱を招いてしまったので、これはやめた。その後は導入の部分で、授業の本質に切り込むような話をする中で、本時の授業の概要を示すというオーソドックスな方法を取ってみた。また年度の最後では、あえて枝葉を切り落として大雑把な筋で授業を構成したり、人物を取り上げてトピック的に授業内容を再構成したりすることも試みた。これは、年度末が近づき残り授業時間数が少なくなる中でいかに範囲を終わらせるかという事情によるものだった。しかし、大きな流れ、時代の変化が浮き彫りになることで、逆に生徒は個々の細々とした事項に目を奪われず、全体としての理解ができたのではなかろうか。

研修時の試みを踏まえつつ、今年度はなるべく一コマ完結で授業をすべく内容の取捨選択を行い、不足する情報はまとめてプリント配布や問題集の自学自習などで補う形をとっている。年間を通して、全体としてどのような歴史像を生徒に構築させるかは歴史的分野の大きな目標だと考えるが、そのためにも一コマの授業、そして年間の授業をどのように経営していくかは大事である。これもまた今後の課題としたい。

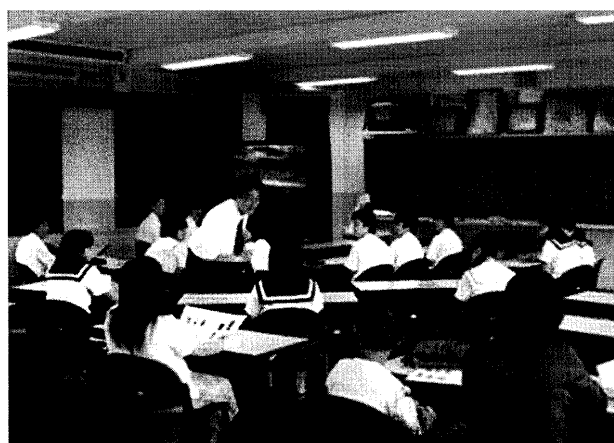
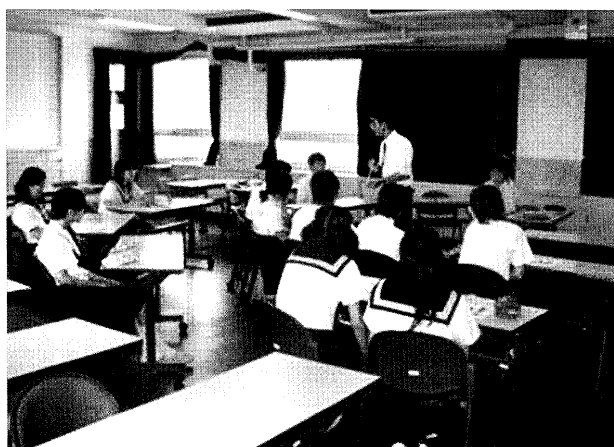
また3度にわたる研究授業は、それぞれ異なる生徒集団を対象とし、それぞれ別個の目的を持って行った。以下、略述する。

1度目の研究授業(5月29日)は、高2日本史の選択クラス(14名)で、維新期の明治新政府の民衆統治を題材に行った。このときの参観者は、校長・運営委員・社会科教員のほか、本校教育実習生30名近くであり、私自身の授業改善という目的と共に、これから実習授業をしていく実習生たちに課題発見・検討の場を提供するという目的を持ったものでもあった。授業としては、少人数のクラスであったこと、五榜の掲示の実物を見せたことなどもあり、生徒の反応も良かったが、反省会では授業の展開・発問のあり方などについて厳しい意見をいただいた。(指導案については、末尾に掲載)

2度目の研究授業(8月29日)は、本校のオープンキャンパスにおける公開授業の一講座として、指導教員の観

察のもと行われた。対象となる生徒は、本校入学を希望する中学生(15名程度)である。ゆえにこの研究授業では、クラスとして成立していない集団をいかに引き込んで授業を展開するかが大きな目的であった。題材は、奈良時代の上級貴族の生活の様相を探るということで、具体的には遺跡・木簡から長屋王の生活を考えることとした。授業の中で生徒が一番興味を示したのは木簡の文字を判読するところで、「牛」や「犬」など身近な言葉を読めたときは非常にうれしそうだった。また自分で判読した情報を集めていくことでみえてくる、貴族の生活の全体像にも興味を持ってくれたようである。生徒の反応は私のねらいどおりであったが、いかに道具立てと授業の筋道の立て方が大事であるかを再認識する機会であった。他に、プレゼンターで遺跡の写真を見せたことや自作の木簡レプリカを提示したことなども効を奏したようである。

3度目の研究授業(3月13日)は、高1世界史(40名程度)で行った。本校は2006年度からSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受けているため、社会科とSSHという関わりを追求したいという意識が私にはあった。そこで筑波大学附属駒場中・高等学校の社会科SSH実践「科学者の責任」(公民的分野)を歴史的



分野に応用し、戦後の核拡散の問題を扱うことにした。シラーらの核抑止論と湯川秀樹らの核拡散論の二つの主張を提示し、その問題点・賛否について生徒に議論させることが目的だったが、残念なことに研究授業では説明の部分で時間を使ってしまい、問題点を漠然と提示するにとどまってしまった。原爆投下の歴史的文脈の問題なども含め、2～3コマ配当で実践すべきテーマであつたらうと反省している。なお、この研究授業では、指導教員のアドバイスもあり、専門の社会科教員だけではなく、他教科を受け持つ高1学年団の教員にも観察してもらい、高1の生徒たちの学びの様子についても考える機会を持った。反省会は他教科の実践がどうであるか、他教科では自分の教えている生徒はどのように動いているかという点を軸に行われた。社会科の枠にとらわれない意見・感想を得られたことは貴重であった。この実践のまとめについては、後日を期したい。

その他、東京大学教育学部附属高等学校において行われた中高一貫研究会（2月16日・17日）での公開授業における「学びの共同体」の実践を参考に、グループでの学習を実験的に試みたりなどしてみた。今後もこの研修での経験・トライアルを生かしていきたいと考えている。

### 3、授業外の研修について

校内における授業外の研修は、週3回程度のペースで、授業のない空き時間に行われた。本校の紀要及び出版物を中心に、本校の教育実践の様子とその歴史について、また教育雑誌の記事などを題材に、昨今の学校教育の抱える諸問題について学んだ。とりわけ本校の特色ある研究活動である総合人間科についてその成り立ちまでを含めて知ることができたことは大きく、今年度高校2年の担任を持つにあたって研究旅行と総合人間科の理念的なつながりがわかっていることに助けられている場面が多い。

また校外における研修では、国立のみならず公立・私立、高校のみならず小学校・中学校など多くの現場教師の方々と接する機会を得、情報を交換できたことはありがたかった。校内の研修ではどうしても、本校の事情を中心に現在の学校教育を考えてしまいがちだが、もっと制度的・環境的に整備されていない中で、しかし工夫を凝らした実践が行われていることを知り、本校が学校教育を行う環境としては比較的恵まれていること、そのことに甘えずに教育実践を行っていくべきことを強く認識した。とりわけ兵庫教育大学における宿泊研修（7月31日～8月3日）では、同じ初任の教師たちと話すことができ、その悩みや情報を共有できたことが財産になったと感じている。

1年間を通じて、指導教員の指導の下、校内・校外に



において学校教育に関わる諸側面について研鑽を積み機会を与えられたが、今年度以降の活動において大きな影響を与えた校外研修として、長野県立辰野高等学校訪問（10月3日）がある。

辰野高校は、学校運営の軸として生徒・保護者・教員の三者による話し合い、三者協議会を行っており、その運営について話をお聞きすることを第一目的に訪問した。幸いに三者協議会立ち上げを行った宮下与兵衛氏から話を聞くことができ、学校を作り上げる三者の協力の必要性、地域との連携の必要性、協議会立ち上げの展開と困難などをお教えいただいた。特に協議会を通じて生徒が自分たちの学校を自分たちで作るという意識に目覚め、生徒が変わったという話が目をひいた。着任した昨年度・今年度と私は校務分掌として、高校生徒会執行部顧問を担当しているが、執行部の頑張りにもかかわらず、生徒会執行部と一般生徒との距離は大きく、意識のズレは甚しい。何らかの形でこれが埋められないかと思う中に、辰野高校の実践は興味深く思われたのである。生徒会執行部が一般生徒の主張を代表するという認識が形成されれば、その活動は全校生徒によって認知され、支持されうる。そのことで全校的に生徒会活動も盛り上がるのではないだろうか、と感じた。

折しも本校でも東京大学教育学部附属中等教育学校の実践などを踏まえての三者協議会開催の機運が高まっており、2007年2月には初めての会として、名大附三者フォーラムを持つに至った。その際には準備会から参加する機会を得たが、この研修の成果を生かすことができた。今年度も2回の三者フォーラムが計画され、7月に今年度1回目が開催された。名大附三者フォーラムの運営・組織作りはまだまた未整備だが、これからの展開の中で研修の結果を踏まえつつ、生徒たちにとって実りのある会にしていきたいと考えている。ちなみにこのことをヒントに、今年度担任を持った学級では、学級通信において三者からの投稿による紙面づくりを行うことで、意見の交流・クラス作りへの協力体制作りを試みている。

#### 4、おわりに

以上、授業・授業外の研修を振り返ることで、初任者研修のまとめをしてみた。最後に本校を含む国立大学附属学校の使命について、研修を経て思うところを簡単に述べておきたい。

国立大学附属学校一つの使命は、やはり研究開発にあると思われる。教員養成系・非教員養成系の如何を問わず、大学の研究機関に「附属」する以上、授業・学級経営・学校運営その他様々な面での研究成果を積み上げていかねばならないということである。

研修で学んだ本校の実践の歴史・紀要・著作物は、その責務を本校が果たし、積み重ねてきたことを良く示している。そのことをこの研修で深く認識するに至った。また近年本校がSSH事業に取り組んでいることもその延長にあることが理解できた。

しかし問題は、この使命を果たせる「環境」が用意されているか、ということである。日常業務が煩雑化する一方で、さらなる負担・節約が強えられる現状はどうだろうか。研究が個人の頑張りのみに解消されるのでは、いつか破綻してしまうだろう。また研究開発における大学諸学部との連携はどうだろうか。いずれの研究分野でも協業が進んでいる昨今、教育実践の研究をする国立大学附属学校もその協業の中に是非加えてもらいたいものである。いずれにしても大学全体の手厚いサポートと協力体制によってこそ、我々は日常業務に、そして研究開発に邁進できることであろう。

もう一つの使命は、地域のモデル学校としてのあり方を追求することである。夏の宿泊研修において地域の学校が附属学校の実践を見習う在り方を一つのモデルとして示された講師の先生がいた。リーディング・スクールとしての附属学校の在り方は、国立大学法人法第一条で国立大学が教育・研究において国民の要請にこたえることをうたっている以上、かくあるべきと考える。

しかし同時に地域の学校と同様の悩みを持つ学校であるという点でも、モデル校であるべきだと私は考える。優等生を純粹培養するような学校として理想的な実践を積み重ねるのではなく、地域の学校の持つ問題点を如何に克服していったかという事例を提示し、そのための様々な試みをしていく場としてあるべきだと思うのである。公立でも私立でもない国立の学校が地域とどのような関わりを持っていくかは、研修の中で度々考えさせられたところである。これもまた今後の課題にしたいと思う。

研修の報告としてまとまりを欠くものになってしまったが、それだけ多岐にわたる研修であり、多くのことに目を開かせてくれた研修であったということである。そのような機会を得たことに感謝したい。

末文となりましたが、初任者研修の指導教員として熱心な指導をいただいた丸山豊氏、研修のためにいろいろご配慮をいただき、またご迷惑をおかけした本校の教職員の皆様方・校外の協力者の方々に、お礼申し上げます。

表 校外研修一覧

研修場所	研修内容	研修日数	実施日
1. 名古屋大学関係の研修 (1)教育学部における研修 (①植田教授他) (②速水教授) (2)文学部、歴史研究会 (若尾教授)	①教育基本法学習会 (新潟大世取山教授ら)	1日	5/26
	②総合実習最終講義	1日	7/19
	①世界史問題 ②高校生と世界史離れ	1日	11/11
2. 愛知教育大学の研修 (子安教授)	①授業分析の方法 ②国際理解教育関連 ③教師の悩みと交流	1日	7/25
3. 社会科実践交流 (南山女子部)	①障害児教育 ②小学校の実態 ③公立中学の実態 ④私立中高の実態	1日	5/20

4. 社会科実践交流 (南山女子部)	①地域の歴史と教材化の実践(高)	1日	12/9
5. 社会科実践交流 (歴史教育者協議会)	①社会科をめぐる問題の講演会に学ぶ ②家庭、保護者と教育の格差問題 ③自主教材のレポート	2日	2/3,4
6. 野外学習実習	①茶臼山での生徒引率宿泊実習 ②企画、運営参加	3日	5/17 18,19
7. 東海地区附属連盟研究会	①教科教育 ②情報交換	1日	8/22
8. 文科省宿泊研修 (兵庫教育大)	①実施計画による	5日	7/31 8/1,2 3,4
9. 私学から学ぶ (1)椛山学園 (2)南山学園	①私学フェスティバル ②私学の実践 ③生徒による運営	2日	7/15,16
10. 公立から学ぶ (県立高校の生徒会)	①生徒会についての取り組み ②生徒の発表指導	1日	10/21
11. 奈良女子大学附属 中等教育学校	①中高一貫の問題と評価 ②特色ある学校づくり ③授業研究	1日	10/20
12. 長野県立辰野高等学校	①憲法と学校教育 ②生徒会指導 ③三者協議会の歴史と課題	1日	10/3
13. 筑波大学附属駒場 中高等学校	①スーパーサイエンススクール ②中高一貫カリキュラム ③研究授業等の参観	2日	11/24, 25
14. 東京大学教育学部附属 中等教育学校	①中高一貫研究会 ②学びの共同体とは ③授業研究	2日	2/16, 17
15. 沖縄研究旅行に どう取り組むか	①歴史学習としての課題 ②総合人間科と研究旅行の関連	3日	3/26, 27,28
校外研修日数		29日	

※この表は、指導教員の丸山豊氏が作成した名古屋大学への報告書から転載したものである。

## <研究授業指導案>

### 高等学校地歴科(日本史A)指導案

日時 平成18年5月29日(月)第4時限

学年・級 第二学年B組(選択クラス 14名)

#### 1、単元 明治維新と西洋文化の摂取

#### 2、単元について

##### (1)単元の意義

本単元で扱う内容は、明治新政府の諸政策と欧米諸国からの影響である。この単元で扱う時期は、旧幕府の影響を排除しながら、欧米列強に追いつくために制度面・外交面・文化面での急速な改革が進められる、非常にめまぐるしい変化の時期だといえる。学習すべき事項は多いが、それぞれの歴史事実を総合した結果として、日本の近代化の最初の一步がどのようなものであったかを理解させることが本単元では重要なことだと思われる。なぜなら現代社会の出発点に当たるのが、この時期の明治新政府の諸政策にあるからである。ゆえにこの単元の意義は、明治維新の展開と文明開化の様相を理解させ、今日の日本社会の出発点となっている部分を確認させる点にある。

##### (2)系統的にみた位置

本単元は「近代国家の成立と東アジア」という大単元の中の一単元である。大単元における本単元の位置づけは、まさに近代国家の成立の第一歩、近代における東アジアとの関係構築の第一歩であり、その内容をしっかりとおさえておくべき単元だといえる。またこの前の単元では「江戸幕府の滅亡」として、ペリー来航から国内の動乱を扱い、一方、次の単元では「自由民権運動と立憲政治の発足」として、言論による立憲国家樹立への展開を扱う。本単元及び前後の単元の中では、近代化の大きな変化である“武力から言論による抵抗へ”という流れが伏在しているが、新政府の諸政策とそれに対する一揆・士族反乱が頻発する生みの苦しみの時期がこの単元で扱う時期である。よって本単元では、前単元で学習した混乱がいかにかに収拾されながら、近代国家が生まれてくるのかを学習し、欧米に対抗する国家体制を作り上げる次の単元へと学習の成果をつなげていくことになる。

##### (3)単元と生徒との関係

明治「新」政府、明治維「新」、文明「開化」など、明治初期の事跡については、旧幕府の「古さ」からの解放、「新しい」華やかな時代の到来といったイメージが生徒たちには強いように思われる。しかし実際には民衆の抵抗がそれぞれの事績の裏に常に見られるので

あり、この負の側面についても冷静に見つめることで、明治という時代の本当の姿が見えてくるのではないかと思う。また明治初期の文明開化については、県内の明治村などで追体験している生徒も少なくないだろう。文章・口頭伝達的な指導にとどまらずに、そのような生徒の経験をいかしながら明治初期という時代のヴィジュアル的なイメージを持たせていく必要があるだろう。

#### 3、目標

- (1)明治新政府がどのようにして中央集権国家を作ろうとしていったのか、その経緯・展開について理解させる。
- (2)欧米列強に対抗できる国づくりのために、制度の整備や産業振興がいかにおこなわれていったかを理解させる。
- (3)明治初期における対外関係の構築の様相と、欧米列強の文化的な影響について理解させる。
- (4)今日の日本の基礎となる部分が、政治的・経済的・文化的諸側面において、どのように形成され、また今日に影響を及ぼしているかを総合的に理解する。

#### 4、指導計画(全9時間)

◎第1・2時間目：戊辰戦争と新政の方針

＜本時の指導 2 / 9＞

第3時間目：版籍奉還と廢藩置県

第4時間目：身分制の改革と徴兵令

第5・6時間目：地租改正と殖産興業

第7時間目：明治初期の対外問題

第8・9時間目：文明開化とその諸相

#### 5、本時の指導

##### (1)目標

前回までの復習を行う中で、江戸幕末期の政治的・経済的混乱が民衆の生活を脅かしたこと、そのために民衆は世直しを期待していたこと、その期待は幕府から新政府に向けられていったことを理解させる。一方で、明治新政府は戊辰戦争及びその後の統治を優位に進めるために民衆の期待を利用したこと、本質的には幕府の統治姿勢と変化がなかったことを、赤報隊の事例や五箇条の誓文・五榜の掲示の史料読解を通じて理解させる。

##### (2)準備

- ・教科書、図説、史料集
- ・携帯プレゼンター
- ・映像用図版：1、中山みき像 2、東京行幸と天杯 3、誓文宣布の図 4、高札場
- ・五榜の掲示(第3の高札)

(3)指導過程 (本時の展開)

	指導内容	学習内容	留意点
導入 10分	<p>図版1を見せる 発問：この人は何をした人か？ 彼女が始めた宗教は？</p> <p>発問：天理教はいつ生まれたのか？ →同時期に新興宗教がいくつも生まれたことを指摘。</p> <p>発問：新興宗教が生まれた時代背景は？</p> <p>☆本日のテーマを板書</p>	<p>答：天理教の開祖</p> <p>答：江戸幕末</p> <p>答：社会が不安定である。など</p> <p>・幕末期における新興宗教の出現が、社会不安にあることを理解する。そのような社会の中で、民衆がどのように生きていたのかを、これから考えていくことに気づく。</p>	<p>・新興宗教という言葉から、怪しげなイメージをさせないように注意する。あくまで、その時代に新たに出現した宗教のことを指していることを指摘しておく。</p>
展開 30分	<p>①「民衆は明治維新に何を望んだのか」</p> <p>発問：幕末の混乱状況について知っていることは？ →民衆の生活圧迫に作用したことを確認 発問：では民衆はどのような動きをしめしたのか？ →キーワードの指摘 世直し エネルギー</p> <p>☆幕末維新=新政府に世直しを望む民衆の姿</p> <p>②「明治新政府は民衆の望みにどのように応えたのか」</p> <p>キーワード草莽の提示 発問：草莽とは何か？例えば、どんな人を思い出すか？</p> <p>発問：赤報隊はどんなことをしたのか？ →庶民のエネルギー吸収、世直しの願いに対応 ↓ 偽官軍としての処罰について指摘</p> <p>発問：なぜ偽官軍として処罰されたのか →新政府は戊辰戦争を優位に戦うために庶民の願いを利用した</p>	<p>答：開国、物価高騰、政変、攘夷、天誅など</p> <p>答：ええじゃないか、世直し一揆</p> <p>・幕末の混乱状況の中で、民衆が世直しを期待していたことを理解する。その望みは、幕府から新政府に向けられていったことに気づく。</p> <p>答：農民・商人らの維新参加、赤報隊</p> <p>答：新政府軍の先導、年貢半減の宣伝</p> <p>・①で確認した幕末の民衆の動向に応じた機能を赤報隊が果たしていたことを理解する。</p> <p>答：新政府の財政難など</p> <p>・赤報隊の例から、庶民の望みを新政府が救い上げたのではなく、利用しただけであるという、新政府と民衆の間のズレに気づく。</p>	<p>・既習範囲なので、今までの知識を確認する程度に留める。</p> <p>・世直しについては、天理教の他の教派神道にもふれつつ、説明する。</p> <p>・時間があれば、東京行幸の時の天杯などの事例についても触れておく (図版2)</p>

	<p style="text-align: center;">↓</p> <p>新政府の政治方針・民衆統治政策にも、同じような姿勢が見られる</p> <p>(1)五箇条の誓文 起草・修正について</p> <p>資料集を生徒に読ませる →由利案と福岡案の違い 福岡案と木戸案の違いを調べさせる。</p> <p>※誓文=天皇を中核にすえた国家作りの宣言</p> <p>(2)五榜の掲示 現物の提示 →釈文の解説&amp;内容理解</p> <p>発問:キリスト教は江戸時代ほとんど扱いだっただか? →明治になっても同じ</p> <p>資料集を読ませる →他の掲示についても確認</p> <p>※新政府の「答え」 =旧来の幕府と同じ政策</p>	<p>由利案=庶民的 福岡案=諸侯的 木戸案=天皇主体的 という変化を遂げたこと、民衆が排除されていったことを理解する。</p> <p>・実際の資料にふれながら、高札としてキリスト教が禁止されたことを理解する。</p> <p>答:禁止・弾圧されていた</p> <p>・誓文の開明性とのズレを認識し、掲示の持つ内容の古さを理解することから、民衆の望みとは違う形での支配を新政府が目指していたことを理解する。</p>	<p>・周囲の生徒同士で相談させる。調べの間、机間巡視。</p> <p>・誓文が天皇に神に誓っている文であることをイメージさせるために図版3を見せる。</p> <p>・高札場についてのイメージを持たせるために、図版4を見せる。</p> <p>・欧米のキリスト教信仰との関わりについても触れておく。</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>民衆の望みと明治新政府の対応 =新政府の「利用」、 民衆の望みとのズレ</p> <p>発問:その後、民衆はどうしたか?</p>	<p>日本の近代化が、民衆の望みとのズレを引きずったまま展開していくことを理解する。</p> <p>答:一揆、自由民権運動近代化の過程で、民衆が武力や言論によって抵抗を試みたことを確認し、次回以降の学習の見通しを持つ。</p>	<p>・次回以降の学習につなげることを考えつつ、事例を挙げておく。 例) 血税一揆</p>

【板書案】

「民衆は明治維新に何を望んだのか？」

- ・幕末の混乱 ex. 物価高騰・・・
- ・民衆の行動 ex. ええじゃないか、世直し一揆  
教派神道（天理教・金光教・黒住教）の出現  
→世直しを望む民衆のエネルギー

「明治新政府は民衆の望みにどのように応えたのか？」

- ・草莽 ex. 赤報隊、相楽総三  
→戊辰戦争の為に利用される
- ・五箇条の（御）誓文（1868.3）=新政府の政治方針  
→天皇を中心にした国家形成を目指す
- ・五榜の掲示（1868.3）=民衆統治政策  
→旧幕府の統治政策の継承
- ※民衆の願いと新政府の政策のズレ  
→一揆、自由民権運動へ